52. 9. 20

私の履歴書

黒沢（くろさわ）酉蔵（とりぞう）

③

京北中学を無事卒業

篤志家から月々十円の学費

明治三十五年秋、私は前橋監獄を出所したが、このくらいの試練でへこたれるものではない。田中正造先生に命を預け、鉱毒被害者救済運動にいっそう身を入れた。

再び学窓へ

しかし、田中先生は、学業半ばで運動に没頭する私の将来を心配され、三十六年暮れ、「ここらで学校へ戻って正式の勉強をしなさい」と言われた。そうして月々十円の学費を送って下さった。

この学費は、田中先生直接からではなく、今村弁護士の手を通じて私のもとに届けられていたが、私はてっきり田中先生から出ているものと思っていた。従って、田中先生のさして潤沢でもない資力の中から割いて下さるのだから、私は「ありがたい」「もったいない」を通り越してむしろ受け取るのがなんとも苦痛で、いつも「もうお断りしよう、お断りしよう」と思い続けていた。しかし、私もまた貧乏苦学生、ついついそれに甘えていた。

ところが、戦後の昭和三十六年、ひょっとしたことで、この学費の出資先がわかった。栃木県の蓼沼丈吉さんという篤志家がその出資先で、蓼沼さんにあてた田中先生の手紙が発見されていきさつが判明した。

書簡は何通もあるが、その大要を記すと、まず、原田定助さんという人を介して、蓼沼さんに私のことを紹介し、学業の援助を願っている。

「……茨城県人黒沢酉蔵氏、将来の学業奨励に付御相談申上候」とあり、私の鉱毒救済の運動の仕方、前橋監獄に入れられたことなど履歴を述べ、

「同人の精神は、正造遠く及ばざる点多く、気力また及ばざる点多し。勉強また及ばざる点多く候。同人は第一正直にして一言発せば皆之を実行するの気象あり。概して正造の遠く及ばざる人に候。正造の事すべて貴下の知る所なり。正造は若き時は、少しく山気あり、全身誠実というべからず。黒沢氏は毫末の山気なきのみならず、非常に堅固謙遜の人に候、正造より見れば欠点すこぶる少し」

たいへんなほめ上げ方で、少々照れくさいが、私は、蓼沼さんという隠れた育英家に改めて感謝するとともに、田中先生の真情にも触れ得て、しばし涙滂沱（ぼうだ）であった。

さらに、田中先生が今村さんの手を通じて学費を渡されていたいきさつも、自分は老齢でもあり、万一の時のことを考えて、若い今村さんに頼んでおけば、のちも黒沢を助けてくれるであろうという深慮からであったという。まことになんとも深い深いお方である。

おかげで、私は明治三十八年三月、京北中学を無事卒業することが出来た。

太平洋戦争後、幾星霜かが過ぎ、昭和三十四年秋、私はたまたま鉱毒問題思い出の利根川の堤防に立った。

それ以前、二十六年十月、財団法人組織の「田中正造記念会」が設立され、佐野市春日岡、総宗寺境内の田中翁墓前で報告祭が行われた。

「……二十年前の肥田沃土は今や化して黄茅白葦、満目惨怛の荒野となれり」という田中先生の直訴文を引用してあいさつしたが、それから八年後、堰堤に立ったとき、はるかに見渡す旧谷中村の遊水池を望見し、まさに「黄茅白葦、満目惨怛の荒野」の思いをまた新たにした。そうして、先生持論の国土第一主義の言葉を思い出したものである。

「国家の本はいうまでもなく国土である。国土は尚ぶべく愛すべく、また培わなければならない。従って国土の上に行われる農業は国の本である。ところが科学の進歩により工業が重視せられ、農業を凌ぎ、これを踏みつけにするようになってきた。まことに富国強兵に忠なるあまり……（鉱業の）害毒が国土を侵し、人命を脅かしているにかかわらず、国の政治がこれを是正し禁止しないばかりか、反って奨励を行い、あるいはこれを援助している。全く本末の転倒もはなはだしく亡国の徴といわねばならない……」

そのうえ、日露戦争の戦勝に酔いしれている時代に、剣による者は剣によって滅ぶと断じ、軍閥亡国論を説き、全世界の軍備撤廃を叫んだ。全く素晴らしい卓見と勇気である。

明治三十八年、私は北海道に渡って一牧夫となり、友人とともに現在の雪印乳業を興したわけだが、常に心の中には田中先生の国土第一主義に共鳴していた。私のいう「健土健民」（健やかな土地に健やかな民族がある）は、先生の持論を受け継いだものであり、私はこれを事業の信念としてきた。今日もまたその信念に毫の変わりもない。

（雪印乳業相談役）

北海道酪農の父と云われる黒沢酉蔵氏の日本経済新聞に寄稿された「私の履歴書」より